

著者コメント——坂口ふみ

奇妙な本をとりあげていただいて、恐縮しております。学術的な本ではないからと御辞退申上げたのですが、その方がよいというお話でしたので、これは学界の余興ないしは息ぬきのためかと、その趣旨でお引きうけいたしました。しかし本も場ちがいなら人間も場ちがいという感じで、学会などは20年ぐらい出たこともありません。これはべつにことさら忌避したわけではなく、ただ物理的な健康上の理由からで、この奇妙な本の成立ちもまた、同じ理由からなのです。10年来、外出、社交等がほとんど出来なかったもので、せめてもの気晴らしのために書いたものです。

したがってこれは、学術論文のようにはじめからあるテーマについて論じようとして書いた本ではなく、多くの偶然と成りゆきに依存したカジュアルな本です。そこで、学会にはおよそ場ちがいと思いますが、まずその成りゆきについてお話しさせていただき、次に、書いている途中で、残っている重要な問題のかずかずに気づきましたのでその2、3に触れさせていただきたいと思います。

山村先生と宮内先生から御質問、御意見をいただいております。山村先生からの御質問・御批判の要旨は、失礼をかえりみずあえて極度に短縮すれば、4～6世紀のヒュポスタシス論と近代の〈個〉の間には800年にわたる東西中世の発展・変化があって、ヒュポスタシス概念の内実は、とくに東方において、より充実し、ポジティブなものなっただろうということかと思えます。宮内先生の御意見は、個の概念を現代にアピールするためには、キリスト論をそのまま提示してもむりで、むしろトマスの *distinctio realis*、アウグスチヌスの思想、アリストテレスのフィリア論等の線に沿うのがよいのではないか、というものかと存じます。御質問にはあとでもう一度触れたいと思いますが、この本のできたカジュアルで非学問的ないきさつをお話しすることが、同時にお答えの一部ともなるかと存じます。

上に申しましたように、根をつめる研究などはできませんでしたので、気散じに、記憶と手持ちの材料だけを使って何か「お話」といった性格のものを書いてみようかと思っていました頃、たまたま親友を亡くしました。彼女のことを書きたいという気持が、最初に筆をとらせたまっかけです。出版社からは中世思想、とくに12、13世

紀について何か書かないかということでしたが、12, 13世紀は一般向けにはあまり面白くないから、ボエチウスではどうかと申してみました。

私のように13世紀あたりからキリスト教や中世や一般にヨーロッパの伝統を覗き見はじめた者にとっては、アウグスチヌスはあまり違和感なくつながるのですが、ボエチウスをはじめいとも奇異な像と思われました。大逆罪での獄死という生涯も劇的ですが、俗人で政府高官でありながら、西方中世で些か不当なまでに評価された神学論文を書き、しかも最も彼の心情を吐露した筈の獄中の名作『哲学の慰め』には、キリスト教の痕跡がほとんど見当たらないのですから。しかしこの困惑は、彼の時代、ティンネフェルトが初期ビザンツと呼んだ時代をよく見ると消え失せます。彼はその時代のまさに典型的な人物で、彼より100年前のアウグスチヌスの方が、ある意味で非典型的のかもしれないことがわかって来ました。それは古典古代文化とキリスト教が混じり合い、争いながら融合し、抽象的神学が理論が政治にとって死活の問題になるという時代でした。ボエチウスはそのような二つの文化（古典とキリスト教）、また現実に対処する二つの基本手段（理論と政治）が融け合っ一つになろうとする過程の苦渋を、身をもって体現した人々の一人であることがわかり、彼を通してキリスト教文化のかかえるいわゆるギリシア寄り、東方寄りのパースペクティブが見えて来ました。

そこでボエチウスを書くことになりましたが、書き出してハタと困ったのは、この人はキリスト論についての論争が終りかけ、ユスチニアヌスによる帝国と教義の統一がなしとげられる前夜の人ですから、教義にまつわる論争と政争の知識を前提にしなければ書けません。ところがそれを素人向けに書いた本が日本語では一冊もないことに気づきました。そこで仕方なく、キリスト教教義の成立史を書くことになってしまいました。

これはしかし、とりかかってみると、私の年来の疑問、つまりキリスト教というまことに不可解な宗教が、なぜこれほど広範囲に、長期にわたって人々の心を動かし、人々を説伏し、文化と社会を支えたのかという疑問への答えを自分自身に与えるという作業の、一つの基礎的スケッチとなったと思います。

ですからはじめはボエチウスの時代までの経緯ということで、レオンチオスで叙述をやめるつもりでした。しかし編集者が、インディヴィデュアルの話だから、何とか近現代の個とむすびつけてくれというので、非常に困ったあげく、あのような終章を

つづくわえました。従って中世がすっぽり脱けおちたわけで、そこにはかなりのむりがあります。

しかし結果としては、はからずもそれがある効果を生んだように思います——というよりは、もう少しうまく書いたら、効果を生みうる構成だったと思います。つまり、ヨーロッパ近現代というものの核を生み出した胚芽を、いきなり成長形・終末形にかぶせてしまうことによって、何が核であったのかを見せる効果を。

もともと、若い頃の私がキリスト教に関心を持つことになったのは、近代ヨーロッパ文化への関心からでした。当時はまだ近代西欧文化の輝かしい成果の残光が、十分なきらめきを持っていました。第2次大戦の結果は、古めかしい日本精神論に対する近代科学技術の勝利と理解され、物理学を代表とする自然科学もまだ素粒子論の曙の時代で、前途はかぎりなく開けるかにみえていました。それにも増して近代ヨーロッパ文学の、どこかに無限の開けを持つ、人間性の賛歌と肯定が、私たちの心をとらえました。さらにヨーロッパで出会った多くの友人たちの、どこか一味ちがう人間への、私への、関わりも、その背後に、意識されないある伝統の分厚さを感じさせました。したがってこの構成自体には、私自身の動機という点からも、ある必然性はありました。しかし中世800年が、ジグゾーパズルのまん中の空白のようにぬけおちていることは事実です。

山村先生の御質問はまさに、そこが脱けおちているではないか、ということで、これは仰せのとおりでございます。私に時間と体力でもありましたら、一方では表信者マキシモスからグレゴリオス・パラマスへ、さらにロシアの思想家たち、ドストエフスキー、ソロヴィヨフ、ベルジャーエフ、パフチーンたちへ、他方ではボエチウスからトマス・アクィナスへ、そしてデカルトへという流れについてのお話も、書きたいものですが、とてもむりだと思います。

ただ、強いてこの構成の弁護をさせていただくとすれば、私は、2000年にわたるキリスト教文化・社会を支えたキリスト教思想の、もっとも重要な仕事はすでにこの4世紀から6世紀にかけての教義論争の間になされていたのではないかと思うのです。つまりそれはヒュポスタシス＝ペルソナという概念をとり出して同定したということです。山村先生はここではヒュポスタシスはいわばピュシスやウシアではないものとして、否定的にしかとらえられていないではないかという御批判をされているかと思いますが、私はこの「区別ととり出しと同定」こそは画期的で、しかもきわめてポジ

ティブな仕事だったと思います。他と区別し、名を与えることは、そのものの持つ豊かな内容の直観に支えられてのみ可能であり、またその内容のさらなる探究や分析を支える土台だと思えます。その豊かな内容とは、かけがえない個（イエスという人の形をとった）との出会いであったでしょう。カルケドンから、あるいはさらに言えば第1ニカイアから、レオンチオスあたりに至る仕事は、それ以後のキリスト教存在論の第1歩を画したものと思います。その意味で、これを近代と結びつけて論じることも、不可能ではないと思えます。

また、これと関連して宮内先生の御意見の、キリスト論を現代では前面に出すべきではないだろうという御意見には、私はむしろ反対でございます。トマスの *distinctio realis* にせよ、アウグスチヌスの思索にせよ。それらの根底にあるのはイエス・キリストという神人・受肉した神との出会いの直観であり、かれらの思索はその概念化・理論化の努力にはかならないので、その直観を抜き去ってしまえば、思索は中核を失って空疎なものになるような気がします。*distinctio realis* もあきらかに4～6世紀の思考の努力につながっており、そのつながりを見失っては、その本当の意味とインパクトが見失われるように思います。ただ、イエスが唯一の、神ないし無限者との橋であるかどうかについては、不信者としてはある留保を感じざるをえません。ひとつのすぐれた橋であったことは疑いないと思えます。

ただし、読みかえしてみても、レオンチオスを論じた箇所「新しい存在論の完成形」という題をつけているのに気がつき、これは誤解を招きうる言い方だったと思いました。正確には完成形というより、最初の土台というべきでしょう。はじめてそれと同定され、他と切り離してそれとみとめられるに至ったことを「完成」と表現したので、誤解を招いたかもしれないと思います。この場合の完成とは、「基礎を据え終えた」という意味だったのです。

いま一つ、まずい表現であったと思うのは「ビザンツ的インパクト」という言葉です。ベックの「ビザンツ的構造」にひかれて作った言葉ですが、一般の了解で「ビザンツ的」というのは、政治的・社会的にはチエザロバビズムとかきびしい階層性とか、また文化的には独特の東方性とか「豪華で内容空疎」とかいうことを含意する場合があります。これは私が本来表現しようとしたこと、つまり「精緻な概念世界と、それを破るより強い力との抗争」とはむしろ逆の印象を与える可能性があります。何と表現するのが適切かわかりませんが、このたびの言葉の選択はまずかったと思います。

以上がほぼ、なぜこんな本を書いたかのいきさつですが、次に、書いておりますうちに、残っている問題がますますはっきりしてまいりましたので、それに触れておきたいと思います。

1、書いていて、構成上どうもうまくいかなかったことが二つありました。第1はさきに申しました中世を省いたこと、近代の叙述も不十分なことですが、第2には、始めと終りの具体的な話の部分と、真中のやや抽象的・歴史的な部分の継ぎ目がうまくいかないことでした。私はだいたい、抽象的なことを書くときでもたいてい、ごく些細で具体的なことから話をはじめます。強いてこじつければ、偶有性こそが存在の深味を示すという、ヒュポスタシ的な書き方でも申しましょうか、しかしこれはこじつけで、好みの問題にすぎないと思います。しかしその間の継ぎ目がどうもうまくいかない、文体があまりにひどく変わってしまうのです。これはもちろん、私の不手際によりますし、テーマが変わると文体も変ってふしぎはないのですが、ひょっとして、日本の翻訳文化の未成熟ということもあるのではないかという気がいたしました。抽象語はだいたいここ100年ほどの、ヨーロッパからの翻訳語が多いわけで、それがまだ本当の日本語になりきっていないのではないかという疑問をこのたび強く持ちました。これは、日本語としてたぶん未消化な翻訳語を、学者といわれるグループの人々が、周到な用意なしに使いつづければ、日本文化の中に、ある亀裂が生じて、私たちが中国やヨーロッパから学んだはずの思想的成果が、人々の心から遠いものになってゆく可能性もあるのではないかという危惧へとつながります。

2、次に、この本はキリストという第2のヒュポスタシの話だけで終って、それにつづく第3のヒュポスタシである聖霊の話に手をつけられなかったというのも大きな課題を残したことになります。

私の理解しましたかぎりでは、ヒュポスタシス＝ペルソナという概念は、単一性(individuality と申しますか singularity と申しますか)と、交流性・関係性を併せたような概念だと思います。したがってこれは、元来、概念化するということ自体が矛盾であるような概念だと思います。概念というものは、アリストテレスを引くまでもなく、本来、流動する現実を静的に固定してとらえるものですから。しかしあえてそれを一つ概念で名づけるとして、その場合、第2のヒュポスタシス＝ペルソナは、その概念の含む二面のうち、どちらかといえば単一者性の比重を強く持ち、第3

のペルソナは交流性と関係性の比重がより大きく、より動的なものという気がいたします。この第3のペルソナへの理解と評価は、東方思想の方ではるかに大きいと思います。

3、さらに、書き残した一番重大な問題は、教義論争時代のヒュポスタシス＝ペルソナ概念の示すものと、近現代の人間の個我概念との間のずれです。

6世紀のこの時期に明確になってきたヒュポスタシス＝ペルソナは、いわば2人称存在です。「イエス・キリストとは何ものか」という問いに対して出て来た概念的な答えですから、その内容は、イエスの内に、かれを信ずる人々が見た「あなた」なのです。それはけっして、人間や私や自我などではありません。

他方、近代のインディヴィデュアルはもちろん被造者で、主として1人称で出て来ますし、ラテン語の「ペルソナ」はもともとケケロぐらいですでに個々の人間という意味を持っていますので、アウグスチヌスも「ペルソナは神と被造物と双方に用いられるほど類的な概念である」などと言って、比較的やすやすとこの概念を1人称へと滑りゆかせております。しかし、4世紀から6世紀の議論を迎れば、ここで追求されているヒュポスタシス＝ペルソナが、イエスに向きあって、その人を神と信ずる者の目に見えてきた「あなた」の深淵であることは明らかであります。その2人称の深淵を、苦心の末に3人称化したものがヒュポスタシス＝ペルソナ概念であります。

これは言葉はネオプラトニズムやケケロから借りておりますが、じつはもはやネオプラトニズムのヒュポスタシスでもなく、ケケロのペルソナでもない、まったく独自の新しい特質と深味を持った概念であります。ネオプラトニズムのヒュポスタシスには形而上学的宇宙原理のおもかげはあっても、ひとの個性・人間の顔の意味はありません。ケケロのペルソナは社会の内に生きる人間の相貌を持ちますが、神的・形而上学的な深さは持ちません。教義論争の中で姿をあらわして来たヒュポスタシス＝ペルソナはその両者を併せ持つものです。エルサレムのレオンチオス風に言えばそれは本来はロゴスたる神でしょうが、しかしやはり受肉した神です。有限者の香りを持ち、有限者と「ヒュポスタシス的に」一つであり、有限者と無限者を橋わたしする無限者です。

この橋の存在によってはじめて、こんどはいわば有限者の内に無限者の香りが見出され、「あなた」とアナログな深淵が、隣人であるあなたの内にも、私の内にも見られてゆきます。このような仕方ではヒュポスタシス＝ペルソナは中世を経て人間の

内へと移され、近代へとひきつがれていっていると思います。

中世から近代、神から人、いわば2人称から3人称・1人称というこの推移は、かなり複雑な経路を経ていると思います。中世800年間の、神と人との関わりについての思弁が、ここには横たわっています。信仰という関係に秘められた神と人の他性と同一性の問題、*imago Dei*の問題、パウロが「私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」(ガラテア2, 20)と語る事態の解析、等々がこの経路の一端を示すと思います。人の神へ至る上昇の道の思弁と実践、キリストという範型のまねびの修練なども、ここにかかわって来ることでしょう。『中世思想研究』39号での谷先生の御批判はこの点についてだと思えます。

4、最後に書き残したこと、あるいはここからあらたな問題として出て来ること、があります。それは、当時、どうしてこれほどに強い理論化の要求があったかということ。私たちにはほとんど異様とも思われる、全ローマ世界を席捲した動きです。国家統一のために必要だったということはありません。しかし同じローマでも、ラテン語圏では理論化要求が、さほど顕著でなかったことを考えると、ギリシア古代に成立した理論性・ロゴス性というものの強力さに、あらためて目をみはる思いがします。これは鉄のごとき強制力を持ち、対話と教育という伝達手段・制度と一体になって、おどろくべき普遍化の力を持っておりました。その力にあるいみで抗い、あるいみでそれと手をたずさえて支え合いながら、個としての個の主張が自らを貫いていったのが、教義形式の時代の動きだったと思います。このギリシア的理論性というものも、それほど単純なものではないように思えます。その本質を、もう一度考え直してみたいと思います。